

1P49

発達障害支援における5歳児発達相談の有用性 (4) —心理相談の役割—

柳川 悦子¹、並木 千恵⁵、大島 美絵³、山崎 友理⁴、横山 和世²

¹柳川小児科医院

²国際医療福祉大学大学院

³栃木県立足利特別支援学校

⁴緑の屋根診療所

⁵相談支援室わかば

【目的】

臨床発達心理士が子どもの行動特性に関する保護者の悩みに寄り添い対応方法を助言し、その後も園との連携を図り、保護者の支援を継続している。今回、同じ悩みを共有する保護者同士のグループワークも行ったので合わせて報告する。

【取り組み例】

5歳児健診のアンケートにおいて、子育ての悩みが深刻であった方、心理相談を希望された方、園や担当地区保健師より保護者の心理状態が心配された方を対象とした。

始めは個別相談で、お子さんの発達状況評価、保護者の心理状態を評価し、対応の仕方や工夫をアドバイスしてきた。

お子さんの発達障害特性が疑われる場合は、さらに小児科医の相談につなげ、診断をうけ、療育や園での個別支援などに繋がり、お子さんの行動も改善がみられた例も多い。

保護者の心理状態が悪い場合、心療内科等への受診を勧める例、子育てこころの相談で継続して経過を見た例もある。保護者の承諾を得て、保健師や園とも連携を行い継続した見守りをする事で状況の改善がみられた。

近年の相談で、自閉スペクトラム（以下ASD）のお子さんの保護者に対する攻撃性が強い例が多くみられ、保護者の悩みも大きかったため、今年度はASD（疑い例も含む）のお子さんの保護者にお集まりいただいて、グループワークを行った。

小児科医による「お子さんの特性理解と子育てのコツ」の講話のあと、困っていることや対応の仕方について、個別の質疑、アドバイスを行った。その後、保護者同士のグループワークでは、悩みを共有し、対応の工夫を出し合い、和やかに交流が図れた。事後アンケートでは、「自分だけではないことにほっとした。」「工夫がわかり、今日からやってみようと思う。」など前向きな意見がきかれた。

【考察】

「親が変われば」と言われるように、保護者の心理状態やお子さんへの対応の改善により、お子さんの心理状態や行動の改善につながる事が確認された。また、グループワークも取り入れることで、保護者同士の連帯感や共有体験がさらに良い結果をもたらすと予想された。

今後は、積極的に相談に来られない人に対するアプローチや支援をどうしていくかが課題である。

1P50

発達障害支援における5歳児発達相談の有用性 (5) —就学への円滑な流れ—

柳川 悦子¹、大島 美絵³、山崎 友理⁴、並木 千恵⁵、横山 和世²

¹柳川小児科医院

²国際医療福祉大学大学院

³栃木県立足利特別支援学校

⁴緑の屋根診療所

⁵相談支援室わかば

【目的】

A市における工夫連携した5歳児発達相談の取り組みにより、早期発見、早期療育が進み、特に就学への円滑な流れにつながったので報告する。

【取り組み】

A市は連携体制が整っているため、園や担当地区保健師からの情報により健診で早めに発達障害などの指摘がされ、療育支援につながっている。しかし、多動や特性の軽い方は集団生活の中で困難が目立ってくるケースもある。そこをもれなく支援すること、また3歳児健診などの指摘でうまくつながらなかった方も5歳児発達相談において見逃さないことは重要なことである。

それに加え、今はそこまで支障がなくても就学後に困難感が出やすい方、限局性学習症（学習障害）になりそうな方、IQ60～70程度の軽度知的障害の方等も早めに支援できる体制も重要であると考え。そのため、統一課題や個別の質問の中でスクリーニングできる方法を工夫し、発達性協調運動障害や軽度知的障害の支援ができる体制を整えてきた。

A市は、5歳児発達相談を通じ、行政、保育、福祉、医療、教育など各分野の連携協力体制が整っており、同じ基準で就学への支援を行っている。就学準備講座を年中から年長にかけて行い、保護者に周知する。就学相談を6～8月小児科医と教育センター担当教員がともに園を訪問し、個別相談を行う。その後各小学校の支援学級見学会なども経て、就学時健康診断、教育支援委員会へとつながるため、早くから保護者も準備でき、就学先を円滑に決定できている。そのため、児に合わせた適切な就学先を選択でき就学後の不適応が少ないと考えられる。

【考察】

5歳児発達相談でのスクリーニングによりその後1年の支援や療育が成果を上げ、さらに就学への円滑な移行により、学校生活での混乱が少なくなっている。支援シートなども充実し、学校への途切れぬ支援が行われている。

今後は、親の受け入れが難しい例、他地域からの転居の例に対しても支援していく。